



天沼熊野神社社報

<http://www.amanumakumano.org/>

平成22年7月1日
発行所
天沼熊野神社
宮司 渡辺 寛
杉並区天沼2-40-2
TEL 03-3220-7866

天沼熊野神社の四季

正月

新年のお参りに、本年もたくさんの方がお参りに来られました。
寒い中ありがとうございました。



八咫鳥

熊野さまのお使いです

皆様のご祈念を元旦から七日迄掲示し、そののちご祈念が叶うようにお祓いを行いました。

結婚式

厳かに、また、ほのぼのとした中で若い二人を祝福致しました。



子供みこし

元気いっぱいにおみこしを担いでくれました。

ドングリ拾い

子供たちも楽しんで帰っていきますが、私も幼い子供たちにパワーを頂きます。



天沼今昔物語 7

1 天沼橋について

前回の社報に誤りがありました。日本大学第二学園の校訓を「信賴敬愛、自主協同、熟誠努力」と紹介致しましたが、「熟誠（じゅくせい…じゅうぶんにできあがること）」ではなく「熱誠（ねつせい…熱情のこもったひたむきな真心）」の誤りでした。お詫びと訂正をさせていただきます。また、グランド横のイチヨウ並木は昭和三年に植樹されたと教えていただきました。そして、杉五小が野球の全国大会で優勝したのは、すごいピッチャーがいた事と併せて、日大野球部の親身な指導があったからだと思います。

それでは、今回は「陸橋」、または「天沼陸橋」と言われている「天沼橋」についてお話をさせていた

きます。

が交差する近くに駅が必要ということで、甲武鉄道の八番目の駅として開設されました。駅舎は南口だけで、天沼からの利用者は青梅街道の踏切（現在の駅東側の地下道付近）を渡って乗降していました。当初は、一日五往復、130人程度の乗降客（現在ではJRが9万人、地下鉄が7万人です）でありましたが、次第に電車の量や、青梅街道を往来する車の量が増え、電車が通過するたびに踏切が下がり、青梅街道が長時間ストップされてしまう問題が生じてきました。その対策として青梅街道を北側に移し、中央線を陸橋でまたごとく計画されたのです。荻窪駅北口が開設されたのは昭和二年で北側の一帯は、まだ原っぱでしたのでそこに青梅街道を通し、道幅を拡げようという計画でした。

立体交差の路線橋工事は、昭和十七年に着工されました。太平洋

戦争が激化してくると、桃井二丁目の中島飛行機製作所（現・桃井はらっぱ公園）や、三鷹、立川方面にある軍需工場からの輸送が増加し、その頃になると、日本の経済はひっ迫していて、工事をしようにも橋を造る為の資材も無く、もう土木工事どころではなくなっていました。その上、完成を目前にした昭和十九年十月の空襲で、爆弾が橋の中央部を直撃し、陸橋と線路を破壊してしまいました。荷物電車を狙った艦載機が、陸橋の下に逃げ込んだ電車のところに爆弾を落としたのです。

終戦を迎え都市再建と共に、陸橋復旧工事は昭和二十三年に始まり二十四年に竣工しましたが、まだ人や牛に引かれた荷車、せいで自動車のみの通行でした。その後、路線橋工事が当時の国鉄管理のもとに再び始まり、長さ42・4メートル幅が青梅街道と同じ25メートルの陸橋が、昭和三十年二月に完成し「天沼橋」と命名されました。また、都電が陸橋を渡ったのは、昭和三十一年で、その使命を終えたのは昭和三十八年です。

この陸橋の完成により、青梅街道の流れや、中央線には支障がなくなつたのですが、荻窪駅周辺の交通は、南は南、北は北に分断されてしまいました。荻窪を南北に行き来しようとする、駅の構内を階段で地下に降りて上る、または、離れた新宿側の地下通路や西口の架線橋を上って下りるしかありません。車を使おうとすると、更に大きく五百メートル以上も迂回して、陸橋が環状八号線を使うほか無いのです。また、電車に乗るにも、階段を下りて、階段を上らなくてはいけない。荻窪駅だけを見ていると不便さが良く分かります。阿佐ヶ谷駅などと比べると不便さが良く分かります。今でこそエレベーターがありますが、それ以前は車いすでの移動もまた大変なものでした。それだけに街の発展に大きな障害となっていました。

現在、平成二十三年完了予定で、立川までの中央線高架化工事が着々と進められています。三鷹駅より西の高架化が大半進み、武蔵境駅や東小金井駅の近辺を南北にスムーズに流れる車を見た

り、実際に走ってみるとその利便



天沼陸橋（昭和三十八年）

性が高まった事を実感するのと併せて、私たちの荻窪駅も高架にして欲しいのだと切に思うところです。

ところが、一度だけ荻窪駅を高架に出来るチャンスがあったそうです。これから以降は「新天沼杉五物がたり」の最後に書かれている『荻窪物語…松葉襄 稿』を抜粋させていただきます。

昭和三十七年頃、当時の国鉄は、中央線の利用度の急激な上昇に対処するため、それまでの複線を高架化して複々線化する計画を進めて

いた。それは、高架化であった。ところが荻窪で大きな問題にぶつかっていたのである。青梅街道が荻窪で線路をまたぐが、陸橋をどう処理するかである。国鉄は、現状のままの地上線にしておくことを決めた。変更は膨大な費用がかかるという理由によるものであった。

計画を知った商店街を軸とした地元は、他の駅が高架で荻窪だけが地上線であることが街にどういう影響を及ぼすかが分からず、それぞれの思惑、情報、利害関係で議論百出した。やがて、なんとか高架化の方向で、一般住民も参加し総ぐるみの運動になった。

そして、国鉄と荻窪地元との最終交渉の土壇場を迎えた。地元としては、とにかく荻窪の将来の為に意見を一つにして、最後の交渉に臨んだ。

国鉄側は、この計画を担当する東京鉄道管理局の最高責任者の局長の出席があり、地元は、国会議員団をはじめ地元代表の有力者すべてを揃え、そうそうたる顔ぶれで、まさに背水の陣をしいての強力な申し入れである。

話は進み、その熱意に押され、さ

すがの国鉄側も高架化しなければならぬ雰囲気変わった。

一呼吸置いて、「では、お尋ねしますが、高架化することは、地元の総意ですね」と、国鉄が地元を念おした。

その時、陳情団の一人が、つぎやくように言った。「いえ、私は、本当は反対なんです」と。一瞬、皆は、あぜんとした声がなかった。それで、すべてが終わった。たった一人の、己の利害のみを考えた反対の声で。そう言った人も、その時の状況を話してくれた人も、今は亡くなっている。だが、今もその問題は残って消えない。

以上参考にさせていただきましたが、実際には、一人の反対だけではなく他にも反対した人はいたそうです。例えば、北口の商店街は賛成で、南口の商店街に全部ではないのですが、反対派の人がいたそうです。その理由としては、複線を複々線にするわけですから、線路の敷地を広げないといけない、そのために南口のほうの土地を国鉄が買収したそうです。この土地を売った人たちが高架化に反対していたとの話も聞きました。

国鉄としても当時の技術で、陸橋を壊しながら電車を運行するのは困

難だったでしょう。今なら一日で出来るかもしれませんが。

今、荻窪駅北口に立つて、まじまじと駅を見ると、さびで汚れた「荻窪駅」と書かれた看板が見えます。「高架化していたら、この看板は新しくなっていたのかな。高架化していたら、歩いて北から南にすつと行けるのになあ。電車が高架を走ると、タウンセブンもルミネも違う姿に成っていただろうなあ。」と、想像すると、残念だったなあと思う次第であります。

また、現在も荻窪駅の高架化をJRにお願いしているそうですが、エスカレーターやエレベーター、天沼橋にJRがお金を出していることを考えると難しいでしょうね。



荻窪駅東側大踏切（昭和十九年）

お宮と神さまなぜなに問答

七夕で笹竹に短冊をつけるしきたりはいつ頃始まったのですか。

「七夕」といえば、牽牛星と織女星が年に一度、七月七日に天の川をはさんで逢うことができるという伝説が有名です。この伝説から、織女星をお祭りして裁縫や習字などが上達するように祈る「乞巧奠」という行事が生まれました。

これら、中国から伝来した伝説と行事が、日本に古くから伝わる棚機女（神衣を織る乙女）の伝説と結びつき、奈良時代には宮廷や貴族の間に取り入れられて、そして民間にも普及していきました。ちなみに、笹竹に色紙や文字を書いた短冊をつけて、軒先に立てるしきたりは、江戸時代になってからのことといわれています。

また、七夕の日には、髪を洗ったり、子どもや牛馬を水浴びさせたりする風習が、各地に残されていることから、お盆を控えての、穢れを祓い清める行事であったとも解釈されています。つまり、七夕の行事というのは、いくつもの要素が合わさり、できあがった風習といえます。

お盆は仏教だけの行事なので、すか。

「盆」とは仏教固有の行事のように考えられがちですが、決してそうではありません。これは、正月行事などと同じように、古くから伝わる日本固有の先祖祭りの行事なのです。その日本の行事と、仏教という先祖供養の行事が一緒になり、盆として習俗化したといわれています。

盆には、亡き人の霊が家に戻ってくると思われ、もともとは旧暦の七月十五日を中心に行われていましたが、現在では新暦の七月十五日に行う地方と、旧暦の七月十五日に近い八月十五日に行う地方とがあります。

一般に盆という言葉は、孟蘭盆会（梵語ウラバーナの音訳）の略とされていますが、供え物を載せる容器を、かつては盆といったことから、この行事を盆というようになったとの説もあります。

いずれにしても、盆という行事は日本人にとって、先祖の御霊を祭る意味を持つことから、とても重要視されているのです。

十五夜・十三夜に、団子や餅を供えるのはなぜですか。

「十五夜」とは旧暦八月十五日、新暦では九月中旬あるいは下旬に、満月を鑑賞する行事です。「お月見」「名月」「中秋の名月」ともいわれ、昔から月見の好時節として詩歌や俳句の題材にもなっています。

一般的に十五夜には、すすきを花瓶に挿して、団子と里芋や梨などその時期の成り物を供えて、感謝の気持ちを表します。関西から中国地方にかけては、里芋を供えることから「芋名月」ともいい、もともとは芋類の収穫祭、すなわち畑作儀礼だったと考えられています。

このような月見の習慣は、中国では唐の時代からあり、これが日本に伝来しました。そして、畑作物の収穫に関連する行事へと発展し、現在に至るまで長い間伝承されてきたのです。

十五夜から約一ヵ月後の、旧暦九月十三日を「十三夜」といい、十五夜に月見をしたなら、必ず十三夜にも月見をするものとされています。十五夜だけでは「片月見」といって忌まれていたのです。また、十三夜は「豆名月」または「栗名月」ともいわれ、枝豆や栗なども供えられます。

編集後記

前号、天沼今昔物語では皆様からご指摘、助言を頂いたり、第二学園の理事長から『全職員にこの社報を配って読ませてほしい。』とご希望があったりと反響に驚いています。

「いま世界で、一国家一文明とされているのは日本だけだ。他の文明国はどこも、言葉も違えば人種も違いますから。東アジアはシナ文明圏で、この中には韓国なんかも入るのですが、どうしても日本だけは入らないんです。なぜならなにかというと、それは日本に、シナのいかなる王朝より古い神話と、それと結びついた皇室と神社があるからです。皇室と神社が揺るがないものですから、仏教のような外来の思想が入ってきて、独自の発展をして日本独特の仏教になった。

我々はこのことを良く認識して、しっかりと歴史観を持ち、国家意識を取り戻して、日本を守ってゆかなければならないのです。」と、渡部昇一氏が知致6月号で書かれています。神社の重要性を再認識する次第です。

また、日本の歴史を学ぶと共に郷土の歴史を学ぶことも大切だと安岡正篤氏が述べています。はばかりながら、私も諸先輩が残された資料を紐解きながら郷土の歴史を紹介させていただきます。